広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『四書纂疏』所引の朱子学文献について ： 『朱子語録』を中心に
Author(s)	鶴成, 久章
Citation	中國中世文學研究 , 63-64 : 291 - 306
Issue Date	2014-09-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051464
Right	
Relation	

『四書纂疏』所引の朱子学文献について
―『朱子語録』を中心に―

鶴成久章

はじめに

論者は、かつて『四書集註大全』に残された宋元の著作の佚文を調査する過程で、趙順孫撰『四書纂疏』を頻繁に参照した。『四書集註大全』では、藍本とされる『四書輯釈』所引の諸文献を取捨選択しながらそのまま使っているが、『四書輯釈』が「文集曰」「語録曰」等と明示して朱熹の著作を引用していたのを、『四書集註大全』では他の「大全」と同様の改竄を施して、「朱子曰」としてしまっている。[1] それに対して、『四書纂疏』では朱熹の著作を引用する際には、「易本義曰」「易啓蒙曰」「詩伝曰」「太極図解曰」「通書解義曰」「文集曰」「語録曰」と典拠を明示する。ところが、『四書纂疏』の中に「語録曰」と指摘があるにも関わらず、『朱子語類大全』に未収であったり、文章が異なるものが時々見られることが気になった。また、『四書纂疏』には朱熹及びその後学十三名の著作が多数引用されているが、それらの中には、陳淳[2]（字は安卿、号は北溪、龍溪の人、一一五九～一二二三）の『大学口義』『中庸口義』をはじめ多くの佚書が含まれている。もちろん、引用に当たって趙順孫が意図的に原典を省略したり改変した可能性はあり、また意図せぬ誤引も少なくないかもしれない。とはいえ、『四書纂疏』に残存する文章には、南宋末期の朱子学文献の原貌を見ることができるのではないかと思われる。

本稿は、「朱子語録」を中心に、『四書纂疏』所引の朱子学文献をめぐって気付いた問題の一部を報告するものである。

一　『四書纂疏』の成立年代

『四書纂疏』二十六巻の編者である趙順孫（一二一五～七七）は、字は和仲、号は格庵、浙江縉雲の人、淳祐十年（一二五〇）の進士である。[3] 伝記は『金華黄先生文集』巻三十「格庵先生阡表」[4]に詳しい。それによると、朱熹より三伝の後学である。彼が『四書纂疏』を完成さ

せたのがいつであったかはよくわからない。佐野公治氏は「一二五〇年代以降、南宋が滅亡する一二九〇年を僅かに遡る時期の作品である」（『四書学史の研究』二三〇頁）と言われるが、『四書纂疏』に序文を寄せた洪天錫（字は君疇、号は陽巌、福建晋江の人、宝慶二年・一二二六年進士、謚は文毅）は咸淳三年（一二六七）に逝去しているので、完成がそれ以前であることは疑いない。また、『四書纂疏』は全書が一度に作られて出版されたのではない。『中庸纂疏』に冠せられている牟子才（字は存叟・節叟、号は存斎、四川井研の人、嘉定十六年・一二二三年進士、謚は清忠）の「中庸纂疏原序」には宝祐四年（一二五六）十一月と書かれており、その序文では『大学章句疏』（『大学纂疏』）に言及している。このような事実を勘案すると、『四書纂疏』のうち少なくとも『大学纂疏』『中庸纂疏』は、宝祐四年頃には出来上がっていたと考えてよいであろう。一方、洪天錫の「四書纂疏序」を見ると、その内容は『論語纂疏』『孟子纂疏』を対象にして書かれていることがわかる。また、『経義考』巻二百五十二に載録する応俊（浙江臨海の人、嘉熙二年・一二三八年進士）の序文に「『論』『孟』成、会縉雲令王君既済已刊『中庸』『大学』、遂併刊於学官云。」と言う通り、まずは『大学纂疏』『中庸纂疏』が刊行され、その後に『論語纂疏』『孟子纂疏』が作られ併せて出版されたことがわかる。『四書纂疏』の主な版本には次のようなものがある。

四書纂疏二十六巻、元刊、二〇冊、補写、静嘉堂文庫
　皕宋楼旧蔵本
四書纂疏二十六巻、通志堂経解、（清）納蘭性徳輯、康熙十九年序刊[5]
大学纂疏一巻・中庸纂疏三巻・論語纂疏十巻・孟子纂疏十四巻、四庫全書（内府蔵本）
四書纂疏二十六巻、和刻本、江戸昌平黌、文化十三年（一八一六）刊（覆清・通志堂経解本）
四書纂疏二十六巻、復性書院校刊本[6]、民国十四年（一九二五）馬浮跋
大学纂疏・中庸纂疏　黄珅整理、華東師範大学出版社、一九九二
四書纂疏、儒蔵・精華編（一一二・一一三）、北京大学出版社、二〇一四

二　『四書纂疏』に引用される諸文献

当然のことながら、『四書纂疏』には、「愚謂～」「愚案～」等といったかたちで、趙順孫自身の朱子学解釈も沢山示されている。しかしながら、本稿ではそれらについては取り敢えず措き、『四書纂疏』に引用される朱熹及びその後学十三名の著作について注目してみたい。「四書纂疏引用総目」[7]には、次のように記されている。

晦庵先生　『易本義』『啓蒙』『詩集解』『太極解』『通書解』『西銘解』『文集』『語録』

三山黄氏（榦、直卿）『論語通釈』『孟子講義』『諸経講義』『文集』『語録』
慶源輔氏（広、漢卿）『論語答問』『孟子答問』
臨漳陳氏（淳、安卿）『大学口義』『中庸口義』『字義』『文集』『語録』
三山陳氏（孔碩、膚仲）『大学講義』『中庸講義』
建安蔡氏（淵、伯静）『易伝』『中庸通旨』『中庸思問』『大学思問』『化原問辨』『性情幾要』
建安蔡氏（沈、仲黙）『書伝』
栝蒼葉氏（味道、知道）『講義』『文集』
南康胡氏（泳、伯量）『論語衍説』
永嘉陳氏（埴、器之）『経説』『木鍾集』
三山潘氏（柄、謙之）『講説』
莆田黄氏（士毅、子洪）『講義』
建安真氏（徳秀、景元）『大学衍義』『読書記』『文集』
建安蔡氏（模、仲覚）『大学演説』『論語集疏』『孟子集疏』『講義』

『纂疏』所載二黄氏、三陳氏、惟勉斎、北渓不書郡。

餘以郡書。若三蔡氏、則一門之言　更不別異。

最初に触れたように、『四書纂疏』が朱熹の著作を引用する際には、「語録曰」「文集曰」等々と典拠を明示している。因みに、「語録」「文集」以外の朱熹の著作については、それほど引用は多くない。『易本義』（「易本義曰～」）は『中庸纂疏』『論語纂疏』に各一条、『啓蒙』（「易啓蒙曰～」）は『論語纂疏』に一条、『詩集解』（「詩伝曰～」）は『中庸纂疏』に三条、『論語纂疏』に一条、『孟子纂疏』に十三条、『太極解』（「太極図解曰」）は『大学纂疏』に一条、『通書解』（「通書解義曰～」）は『中庸纂疏』に二条と『論語纂疏』に一条、それで全てである。『西銘解』[8]は引用があるのかどうか未詳である。

また、「総目」末尾の附記に言うように、「黄氏曰」とあれば、それは黄榦（字は直卿、号は勉斎、一一五二～一二二一）の言葉であり、「陳氏曰」とあれば、陳淳の言葉である。他の黄氏、陳氏の場合は姓に出身地を冠しているので、誰の発言であるかが特定できる。しかし、「建安蔡氏」だけは、一門の学説としてまとめられ、蔡淵（字は伯静、号は節斎、一一五六～一二三六）、蔡沈（字は仲黙、号は九峰、一一六七～一二三〇）、蔡模（字は仲覚、号は覚軒、一一八八～一二四六）のうちの誰の発言かを明示していない。もっとも、蔡沈の著作は『書集伝』しか載録されていないので、それを除けば、結局は、淵と模の両者の区別のみということになるが、これについても、『易』『中庸』関係の学説は蔡淵、『論語』『孟子』関係の学説は蔡模の言葉である可能性が高いことがわかる。

黄榦については、「北京図書館古籍珍本叢刊」第九〇冊に、『勉斎先生黄文肅公文集』四十巻附集一巻（元刻延祐二年重修本）が収められており、全てではないかもしれないが、彼の『文集』『語録』は見ることができる。また、『孟子講義』『諸経講義』の一部もこれに収録されている

可能性もあるが、『論語通釈』[9]は佚書であると思われる。

輔広（字は漢卿、号は潜庵）の『論語答問』[10]と『孟子答問』[11]は佚書であろう。

陳淳の『字義』については、詳細は省くが、『北溪字義』の各種版本が残っており、[12]また『文集』についても同様に、『北溪先生全集』五十巻の各種版本が現存するが、『大学口義』『中庸口義』[13]『語録』は散佚してしまっている。ところが、『四書纂疏』には『大学口義』『中庸口義』、あるいは『語録』の佚文と思われるものが大量に残されている。

陳孔碩（字は膚仲・崇清、淳熙二年・一一七五進士）の『大学講義』と『中庸講義』[14]も佚書であろう。

建安蔡氏の場合、蔡淵の『易伝』については、同一の著作ではないかもしれないが、『周易赴爻経伝訓解』二巻と『易象意言』一巻が『四庫全書』に著録されている。そして、蔡沈の『書伝』については、『書集伝』六巻の各種版本が伝存している。また、蔡模については、『孟子集疏』が『通志堂経解』『四庫全書』に入っており、「四庫提要」には「趙順孫『四書纂疏』載模所著有『大学演説』『論語集疏』『孟子集疏』、今惟此書存。」と言う。[15]建安三蔡氏のこれら以外の著作は、輯佚書である『蔡氏九儒書』九巻首一巻（清雍正十一年蔡重刻本）によって見られるものもある。『蔡氏九儒書』は複数の機関に所蔵されており、『四庫存目叢書』集部三四六冊にも影印本が収められている。

葉賀孫（字は味道）の『講義』[16]と『文集』、及び胡泳（字は季水、号は伯量）の『論語衍説』[17]は佚書であろう。

陳埴（字は器之）の『木鍾集』は、『潜室陳先生木鍾集』十一巻の各種版本が伝存している。『四庫全書』にも『木鍾集』十一巻が著録されており、「四庫提要」には「是編雖以集為名、而実則所作語録。」という。『経説』の方は佚書であろう。

潘柄（字は謙之）の『講説』[18]、及び黄士毅（字は子洪、号は壺山）の『講義』[19]も佚書であろう。

真徳秀（字は希景ほか、号は西山、慶元五年・一一九九年進士、一一七八～一二三五）は伝存する著作の種類、版本ともに極めて多い。『大学衍義』『読書記』『文集』は、『四庫全書』に『大学衍義』四十三巻、『西山読書記』四十巻、『西山文集』五十五巻が著録されているほか、『四部叢刊』にも収録されている。

なお、朱熹以外の学者の著作は、引用に当たってその書名が明示されてはいないが、「四書纂疏引用総目」に挙げられる書は散佚したものが多く、これらを拾い集めて整理すれば、朱熹後学の「四書」解釈はじめその思想を分析する資料として有益であろう。

三　『四書纂疏』と元明の「四書」注釈の集成書

南宋から明の『四書集註大全』に至るまでの「四書」注釈の集成書[20]の主なものについては、『四庫全書総目提要』（巻三十六「四書類二」）「四書大全三十六巻」に簡潔に

まとめられているが、[21]その主要部分は顧炎武の『日知録』巻十八「四書五経大全」の引用である。

……その書は、元の倪士毅の『四書輯釈』に基づいて〔作成し〕、少しばかり字句を改めたのである。顧炎武の『日知録』に、「朱子が『大学』と『中庸』の「章句」「或問」、『論語』と『孟子』の「集註」を作成してから後、黄氏に『論語通釈』がある。〔朱子の〕「語録」を拾い集めて朱子の「章句」の下に付け足すことは、真氏から始まった。祝氏はこれに倣って、『附録』を作成した。後には蔡氏の『四書集疏』、趙氏の『四書纂疏』、呉氏の『四書集成』が出て、是非をあげつらう者はその〔注釈の〕氾濫するのを憂えた。そこで陳氏は『四書発明』を作成し、胡氏は『四書通』を作成し、定宇の門人の倪氏【案ずるに、定宇とは、陳櫟の別号である。】が、二書を合して一書とした。かなり削り正した部分が有り、『四書輯釈』と名付けた。永楽年間に編纂した『四書大全』は、〔これを〕少しばかり増したり削ったりしたに過ぎない。詳細さ簡明さという点では、〔『四書大全』は〕倪氏に及ばないところが多いであろう。『大学中庸〔章句〕或問』は〔内容が〕全く異ならないが、〔『四書大全』には〕ところどころに誤謬がある云々。」と言っている。[22]この書物の委細を語って余すところがない。……

ここにいう「真氏」とは真徳秀のことであり、その著作『四書集編』二十六巻のことを言っている。『四書集編』は『四庫全書』に著録されているが、「四庫提要」の指摘に拠れば、『大学』『中庸』は徳秀の手定によるものであるが、『論語』『孟子』は全て劉承（樸谿）が真徳秀の遺著から補輯したものであると言う。[23]また、顧炎武が真徳秀にならって『附録』を作成したと言う祝氏とは祝洙（字は宗道・安道、建安の人、宝祐年間の進士）のことであり、『附録』とは『四書集註附録』のことであるが、この書は現存しない。[24]なお、蔡氏の『四書集疏』については既述した。顧炎武が趙順孫『四書纂疏』の次に取りあげる呉氏とは呉真子（号は克斎）のことである。呉真子の『四書集成』は現存しない可能性が高いが、[25]この書は倪士毅の『四書輯釈』とともに『四書集註大全』が藍本としたものである。[26]

さらに、顧炎武の記すところに拠れば、『四書纂疏』と『四書集成』について、是非をあげつらう者は注釈の氾濫するのを憂え、[27]そこで陳氏は『四書発明』を作成し、胡氏は『四書通』を作成したという。陳氏とは陳櫟（字は寿翁、号は定宇、休寧の人、一二五二～一三三四）のことであり、胡氏とは胡炳文（字は仲虎、号は雲峰、婺源の人、一二二五～一三三三）のことである。『四書発明』自体は佚書のようであるが、[28]『四書通』は『通志堂経解』に入り、『四庫全書』にも著録されている。[29]そして、この『四書発明』と『四書通』の二書を陳櫟の門人の倪士毅

（字は仲宏、号は道川、歙県あるいは休寧の人）が合わせて一書としたのが『四書輯釈』であるという。但し、『四書輯釈』の成立をめぐっては色々と複雑な経緯があったようである。[30]

ところで、『四書発明』は現存せず、その引用書の詳細は未詳であるが、『四書通』の方は現存しており、その巻頭の「四書通引用姓氏書目」を見ると、朱熹とその後学十三家に趙順孫を加えて、「以上並依『纂疏』『集成』引用」と記されている。[31]一方、両書を集成したとされる『四書輯釈』については、倪士毅はその編纂意図に基づき当初は『重編四書発明』の書名で出版するつもりであったとされ、内容的には『四書発明』に『四書通』の内容を増補したものになっている。『四書輯釈』の「四書集釈大成引用姓氏書目」には、朱熹とその後学十三家に趙順孫を加えた学者の著作については、「以上依『纂疏』『集成』引用」とあり、これは基本的に『四書通』の引用書目によっていると考えられる。[32]

『四書集註大全』は、主として『四書集成』と『四書輯釈』に基づいていることからすると、該書に引用する朱熹とその後学十三家の学説の少なからぬ部分が、その淵源をたどって行くと、趙順孫の『四書纂疏』に由来することがわかるのである。[33]『四書纂疏』に無い資料は、呉真子の『四書集成』所収のものか、あるいは『四書輯釈』が基づいた『四書発明』所収のもの、さらには、「凡例」に「凡諸家語録文集内有発明経註、而『集成』『輯釈』遺漏者、今悉増入。」と言うとおり、『大全』纂修時に若干の増補があったのかもしれない。

四　『四書纂疏』所引「朱子語録」の資料価値

繰り返し述べてきたように、『四書纂疏』には朱熹の著作や語録に加え、朱熹後学の佚文も大量に残されている。とはいえ、引用資料の最も多くを占めるのは朱熹の「語録」である。恐らく、これは『四書纂疏』だけではなく、同時期の「四書」注釈の集成書は、ほぼ同様であったと思われる。そこで、他の文献についてはひとまず措き、ここでは「朱子語録」の問題に限定して基礎的な考察を行ってみたい。

ところで、『朱子語類』の通行本である黎靖徳が編纂した『朱子語類大全』百四十巻は、咸淳六年（一二七〇）に完成しており、『四書纂疏』のうち『大学纂疏』『中庸纂疏』は宝祐四年（一二五六）頃には完成していることからして、『大学纂疏』『中庸纂疏』編纂の際に、趙順孫は『朱子語類大全』を見ておらず、それ以外の「語録」「語類」を使ったことは明らかである。一方、『論語纂疏』『孟子纂疏』が完成したのが、咸淳三年（一二六七）以前であるとすれば、その編纂の際には、やはり『朱子語類大全』を見ていないはずである。なお、黎靖徳が『朱子語類大全』を刊行するに至るまでの各種「朱子語録」「語類」を一覧にすると次のようになる。[34]

『池録』　四三巻、李貫之、一二一五年、池州刊行
『蜀類』一四〇巻、黄士毅、一二二〇年、眉州刊行
『饒録』　四六巻、李性伝、一二三八年、饒州刊行
『婺録』二〇巻、王佖、一二四八～四九年、婺州刊行
『饒後録』二六巻、蔡杭、一二四九年、饒州刊行
『徽類』一四〇巻、張文虎・洪勲、一二五二年、徽州刊行
『徽続類』四〇巻、王佖、一二五二年、徽州刊行
『建別録』不明（二冊）、呉堅、一二六五年、建寧府刊行
『語類大全』一四〇巻、黎靖徳、一二七〇年、建昌府刊行

以下に、管見に及んだ限りで、趙順孫が、『朱子語類大全』未収の「語録」を載録していると思われる事例について幾つか指摘したいと思う。

まずは、既に石立善氏も紹介しているもの[35]だが、朱熹の末子である朱在（字は叔敬・敬之、号は立紀、一一六九～一二三九）が記録した『過庭所聞』が『論語纂疏』（一四一頁上）に一条引かれているのが目を引く。また、黎靖徳の「朱子語類巻目」に附録される「考訂」には、「今観廖徳明録中、猶有『答符舜功書』一条……今皆削。」という指摘があるが、『大学纂疏』（一〇頁上）に「語録曰～」として引かれる、「敬之一字、乃聖学始終之要、未知者非敬無以知、已知者非敬無以守。」という文がまさに、『晦庵先生朱文公文集』巻五十五「答符舜功（叙）」の「嘗謂、敬之一字、乃聖学始終之要、未知者非敬無以知、己知者非敬無以守。」と一致する。これは、元来「池録」にあって『朱子語類大全』編纂の際に黎靖徳が削除した文章であるかもしれない。そうすると、趙順孫が見た「語録」にはこの書簡がまだ収録されていたことになる。さらに、『大学纂疏』（三七頁下）に「沈僩録曰、『将那虚仮之善、来蓋覆真実之悪。』」という引用があるが、これは、『朱子語類大全』巻十六「大学三・伝六章釈誠意」（五二九頁）[36]に見られる「語録」の一部とほぼ同文である。『朱子語類大全』でも記録者は「僩」とあるので、沈僩の記録した「朱子語録」であることがわかる。ただ、『四書纂疏』に「朱子語録」を引用する際には、「語録曰」とあるのが普通で、このように記録者の名前を出すことはない。そうすると、この事例は、あるいは趙順孫の見た古本「朱子語録」と何らかの関係があるのかもしれない。

一方、『朱子語類大全』には全く見られない「朱子語録」の佚文も若干ながらある。例えば、『大学纂疏』「誠知先其本～而至於道也不遠矣」（一四頁下）に附せられた「言知功夫先後次第、則進為有序、不忽近務遠、処下窺高、而其入道為不遠矣、所謂至道之近也。」は、同じ文章が『四書集註大全』にも「朱子曰～」として孫引きされているが、これは、『四書纂疏』に残った「朱子語録」の佚文であると思われる。同じく『大学纂疏』「嘗以整斎厳粛言之

矣」（九頁下）に附せられた「整斎厳肅、是切至工夫説与人。」は、『四書纂疏』の引用書目にも書名の挙がる『西山読書記』巻十九に、「朱子曰、『伊川整斎厳肅一段、是切至工夫説与人。』」とあるので、「朱子語録」の佚文である可能性が高いと考えてよいであろう。その他、『大学纂疏』「然其本体之明則有未嘗息者」（七頁下）の条に引かれる、「此是本領、不可不如此説破。」という語などがそうであるが、「朱子語録」の佚文である可能性があっても、断片的な「語録」の場合は、果たして本当に佚文であるのかどうか判断しかねるものも少なくない。

ところで、別な文献の事例ではあるが、黄震（字は東発、号は文潔、慈溪の人、宝祐四年・一二五六年進士、一二一三～八〇）が編纂した『黄氏日抄』九十七巻は、宋代の学者の「著作」「語録」の佚文を多く保存していることで知られるが、該書には「朱子語録」[37]の引用もかなり見られる。例えば、巻三十八「読本朝諸儒理学書六・晦庵先生語類二」「大学」に引く「知止是識得理之所在、定是有倚靠、静是不動、揺安則純熟矣。由是発於思慮、則無不得。」は『朱子語類大全』には見られず、「朱子語録」の佚文の可能性は高いと思われる。しかし、巻三十七「読本朝諸儒理学書五・晦庵語類一」「大学」に引く「謝氏常惺惺之説、仏氏亦有此語。」は、『朱子語類大全』では、巻十七「大学四・或問上」に、「或問、『謝氏常惺惺之説、仏氏亦有此語。』曰、『其喚醒此心則同、而其為道則異。吾儒喚醒此心、欲他照管許多道理。仏氏則空喚醒在此、無所作為、其異処在此。』（僩）」（五七三頁）とある。従って、問いのみを引用して朱子の「語録」とするのは不正確である。この事例のように、断片的な引用の場合、門人の「問」を勘違いして朱熹の「語録」としている可能性も捨てきれない。

ともあれ、趙順孫が『朱子語類大全』以外の朱熹の「語録」を見ていることはほぼ確実であると言ってよい。では、彼はどういった「語録」「語類」を見たのであろうか。残念ながら、この点については今のところ詳細はよくわからない。しかしながら、『四書纂疏』を見ると、『大学纂疏』の構成が「読大学章句綱領」「大学章句序」～、『中庸纂疏』も「読大学章句綱領」「中庸章句序」～、『論語纂疏』『孟子纂疏』は「読論孟集註綱領」、「読論語孟子法」というかたちになっていることからすると、趙順孫は黄士毅が始めた「語類」の分類形式を踏襲している可能性が高い。そう考えると、少なくとも『蜀類』あるいは『徽類』を見ていると判断してよいのではあるまいか。

五　『四書纂疏』所引「朱子語録」の特徴について

最後に、『四書纂疏』所引の「朱子語録」の特徴として気付いた点を幾つか指摘しておく。

特徴の一つとして、『朱子語類大全』に小字注として載録されている文章を引用する事例がかなりある点がまず注目される。例えば、『中庸纂疏』「是以或危殆而不安」

（五七頁上）に附せられた「語録」に、「危者、欲陥而未陥之辞。」という短い言葉があるが、これは『朱子語類大全』では巻七十八「尚書一・大禹謨」の「人欲也未便是不好。謂之危者、危険、欲墮未墮之間、若無道心以御之、則一向入於邪悪、又不止於危也。」[38]に附せられた小字注、「方子録云、『危者、欲陥而未陥之辞。子静説得是。』（二六六四頁）と一致する。また、『中庸纂疏』「子路好勇～所以為強也」（八三頁上）に附せられた「語録」に、「如和便有流、若是中便自不倚、何必又説不倚。後思之、柔弱底中立、則必欹倒、若能中立而不倚、方見硬健処。」とあるが、これは『朱子語類大全』巻六十三「中庸二・第十章」（二〇六五頁）には次のように記録される。括弧の中が小字注である。なお、傍線部は、『中庸纂疏』所引の「語録」と重なる部分である。

「和而不流、中立而不倚。」如和、便有流。若是中、便自不倚、何必更説不倚。後思之、中而不硬健、便難独立、解倒了。若中而独立、不有所倚、尤見硬健処。（本録云、「柔弱底中立、則必欹倚。若能中立而不倚、方見硬健処。」義剛。）

因みに、この語録は、いわゆる「楠本本」[39]では、巻百十七「訓門人五」（九一〇頁上）に、

如和、便不流。若是中、便不倚、何必更説不倚。後思之、中而不硬健、便難独立、解倒了。若中而独立、不有所倚、尤見硬健処。（義剛）
当初説、中立了。又説而不倚、思之、柔弱底中立、則必欹倚。若能中立而不倚、方見人硬健処。（義剛）

のように、二条が載録されており、後者が『朱子語類大全』に言う「本録」であることがわかる。『四書纂疏』所引の「語録」では両者が一つの文章になっているのである。

また、次の『大学纂疏』「学者於此～以尽其餘」（二三三頁下）に附された「語録」は、『朱子語類大全』巻十六「大学三・伝三章釈止於至善」（五〇七頁）では陳淳録[40]を採用し、小字注に周謨録[41]を引用している。「楠本本」（二〇八頁上）は陳淳録を引くのみである。それに対して、『四書纂疏』では陳淳録と周謨録の内容が合わさって一条になっていることがわかる。

大倫有五、此言其三、『究其精微之蘊』、是就三者裏面窮究其蘊。『推類以通其餘』、是外面推広、如夫婦、兄弟之類。須是就君仁臣敬、子孝父慈与国人信上推究精微、各無不尽之理。此章雖人倫大目、亦只挙得三件。必須就此上推広、所以事上当如何、所以待下又如何、尊卑小大之間、処之各要如此。（『四書纂疏』）

周問、「『注』云、『究其精微之蘊、而又推類以通其餘。』

何也。」曰、「大倫有五、此言其三、蓋不止此。『究其精微之蘊』、是就三者裏面窮究其蘊。『推類以通其餘』、是就外面推広、如夫婦、兄弟之類。」（淳。謨録云、「須是就君仁臣敬、子孝父慈与国人信上推究精微、各無不尽之理。此章雖人倫大目、亦只挙得三件。必須就此上推広所以事上当如何、所以待下又如何。尊卑小大之間、処之各要如此。」）（『朱子語類大全』）

一方、次の甲、乙、丙については、『大学纂疏』が三箇所（五頁上、五頁上、九頁上）に分けて引用しているが、『朱子語類大全』巻七「学一・小学」（二七〇頁）では一条になっている。「楠本本」（九三頁下）は文字と小字注にわずかな相違が見られるが、『朱子語類大全』とほぼ同文である。

【甲】只是一箇事。小学是学事親、学事長、大学便就上面講究委曲、其所以事親是如何、事長是如何。(42)

【乙】古人於小学存養已自熟了、根基已深厚了、到大学、只就上点化出些精彩。

【丙】小学而今都蹉過了、不能更轉去做得、只拠而今地頭便劄住、立定脚跟做去、栽種後来根株、補塡前日欠闕。如二十歳覚悟、便従二十歳立定脚跟做去。如三十歳覚悟、便従三十歳立定脚跟做去。便年八九十歳覚悟、亦当拠現定劄住硬寨做出。

問、「大学与小学、不是截然為二。小学是学其事、大学是窮其理、以尽其事否。」曰、「只是一箇事。小学是学事親、学事長、且直理会那事。大学是就上面委曲詳究那理、其所以事親是如何、所以事長是如何。古人於小学存養已熟、根基已深厚、到大学、只就上面点化出些精彩。古人自能食能言、便已教了、一歳有一歳工夫。到二十時、聖人資質已自有十分。（寓作「三分」。）大学只出治光彩。今都蹉過、不能轉去做、只拠而今当地頭立定脚做去、補塡前日欠闕、栽種後来合做底。（寓作「根株」。）如二十歳覚悟、便従二十歳立定脚力做去。三十歳覚悟、便従三十歳立定脚力做去。縦待八九十歳覚悟、也当拠見定劄住硬寨做去。（淳。寓同。）」

『朱子語類大全』は陳淳録を採用しているが、小字注によって、徐寓(43)にも同じ記録があったことがわかる。さらに、元の張光祖撰『言行亀鑑』(44)巻一「学問門」に、

晦庵先生朱熹字仲晦曰「今人不曾做得小学工夫、一旦学大学、是以無下手処、今且当自持敬始、只拠而今地頭便立定脚跟做去、栽種後来根株、補塡前日欠闕。如二十歳覚悟、便従二十歳立定脚跟做去。三十歳覚悟、便従三十歳立定脚跟做去。便年八九十歳覚悟、亦当拠定見立定硬寨做去。」

という引用があるが、これは徐寓録によるものかもしれ

ない。管見による限り、陳淳録と徐寓録との扱いをめぐっては、『朱子語類大全』と『四書纂疏』が同じ内容の語録を記録する場合については、『朱子語類大全』はほぼ陳淳録を採用するのに対して、『四書纂疏』は徐寓録を採用している点も特徴として指摘できよう。右の事例でも、『朱子語類大全』の「栽種後来合做底」の箇所に「寓作『根株』と注しているのに対し、『四書纂疏』に引く語録の該当箇所が「栽種後来根株」となっていることからして、趙順孫は徐寓録に拠っていると考えてよかろう。同様に、次の資料でも、『朱子語類大全』の「確定」の注に「徐録作『堅確』」と言っているが、『四書纂疏』に引用する「語録」は「堅確」になっている。

問、知至而後意誠、而此云格物窮理、立誠意以格之、何也。曰、此誠字、説較浅、未説到深処、只是堅確其志、樸実去做工夫。（『四書纂疏』三〇頁下）

問、「立誠意以格之」。曰、「此『誠』字説較浅、未説到深処、只是確定（徐録作「堅確」）其志、樸実去做工夫、如胡氏『立志以定其本』、便是此意。（淳。寓同。）」（『朱子語類大全』巻十八「大学五・或問下」六一〇頁）

『朱子語類大全』が陳淳録を採用することが多いのは、黎靖徳の陳淳に対する評価が反映されている可能性が高いであろう。一方、『四書纂疏』が徐寓録を採用する理由については、恐らく、趙順孫が基づいた「朱子語録」との関係によるものであろう。但し、『朱子語類大全』は陳淳録を重視しているように思われるが、次の資料を見ると、『大学纂疏』（三一頁下）と「楠本本」（二六一頁上）ほか諸本にある「不可道未知之前、便不必如此。」の語を[45]『朱子語類大全』巻十八「大学五・或問下」（六一四頁）では欠いている。黎靖徳が意図的に削除したとも思えず、なぜこの語を欠くのはよくわからない。

問、是既知後、便如此養否。曰、此不分先後。未知之前、若不養之、此知如何発得。既知之後、若不養、則又差了。不可道未知之前、便不必如此。（『四書纂疏』）

楊子順問、「『養知莫過於寡欲』、是既知後、便如此養否。」曰、「此不分先後。未知之前、若不養之、此知如何発得。既知之後、若不養、則又差了。（淳。寓同。）」（『朱子語類大全』）

『四書纂疏』には、ごく短い断片的な語も含めて「語録曰」とする引用が二千以上もある。しかしながら、「語録曰」と指摘するのが、『晦庵先生朱文公文集』の文章である場合も少なくない。例えば、『中庸纂疏』「或問、民鮮能久～益明白矣」（七八頁上）に、

語録曰、緣下文有『不能期月守』之説、故説者皆以為

久於其道之久。細考両章、相去甚遠、自不相蒙、亦只合依論語説、蓋其下文正説道之不明不行、解能知味、正与程子意合也。

とあるが、これは、『晦庵先生朱文公文集』巻四十三「書（知旧門人問答）」に収められた「答林択之」（一九七八頁）と同文である。これ以外にも、現在の『晦庵先生朱文公文集』中の「書（知旧門人問答）」に収められる書簡を、『四書纂疏』が「語録曰～」として引用する例は少なくない。さらには、『晦庵先生朱文公文集』に収録される「中庸首章説」（巻六十七）、「已発未発説」（巻六十七）等の一部も、『四書纂疏』に「語録曰～」として引かれている。また、『中庸纂疏』巻三「謂故学之矣～而尽乎道体之細也」（一二八頁上）に、「語録曰～」として引かれる次の文章は、「玉山講義」（巻七十四）の一部である。

道之為体、其大無外、其小無内、無一物之不在焉。故君子之学、既能尊徳性以全其大、便須道問学以尽其小。

因みに、「玉山講義」は、古本「朱子語録」の一つである『晦庵先生語録大綱領』附録下に「答程珙問仁義之説」という題で収録されている。[46] このように、古本「朱子語録」の中には、朱熹の書簡や著作が色々と附録されていて、それらが「語録」と混同された可能性もあるであろう。勿論、趙順孫が見た「朱子語録」にはそれらの語が「語録」として載録されていたのかもしれないが、この点についてはよくわからない。

おわりに

本稿では、紙数の問題もあり、『四書纂疏』所引の「朱子語録」について、それもごくわずかな事例に基づいて検証してみた。以上に見てきたことにより、趙順孫の『四書纂疏』には、『朱子語類大全』が完成する以前の「朱子語録」の文章が残されている可能性が高いことがほぼ明らかになったと思われる。また、「朱子語録」のみならず、『四書纂疏』を通じて、散佚した朱子学文献の内容を窺うことが可能であり、さらには、現存する朱子学文献の校勘資料としても様々な価値を有すると言ってよいのではあるまいか。

注

（1）『四庫全書総目提要』巻三十七「四書類存目」「重訂四書輯釈二十巻」に、「……至明永楽中詔修『四書大全』、胡広等又併士毅与逢之書一概竊拠、而『輯釈』『通義』並隠矣。……」と指摘する。同様の指摘は、『日知録』巻十八「四書五経大全」にもあり、『四書集註大全』の「提要」もそれを引いている。

（2）陳淳の思想とその著作については、佐藤仁氏『朱子学の基本用語　北溪字義訳解』（研文出版　一九九六）参照。

（3）佐野公治氏『四書学史の研究』（創文社　一九八八）第四

章・三（一三〇頁）、『新集四書註解群書提要附古今四書総目』（華泰文化事業股份有限公司　二〇〇〇）上冊（一〇頁）等による。『縉雲年鑑　二〇一〇』「古代名人選介」（四一五頁）では「景炎二年（一二七七）病故」とある（CNKI版による）。

（4）蓋公父少傅魏公雷、師事考亭門人滕先生璘、授以尊所聞集。公以得於家庭者、溯求考亭之原委、『纂疏』所由作也。

（5）翁方鋼撰『通志堂経解目録』に、「何焯曰、『汲古宋本。』」と言う。本稿に引用する文章は、「通志堂経解」本を影印した『四書纂疏　附引得』（台湾・学海出版社　一九九三）による。

（6）影印本（台湾文史哲出版社、一九八六）がある。

（7）『四庫全書』本、静嘉堂文庫本による。『通志堂経解』本では削除している。

（8）淳熙年間刊の宋本『朱子文集』前集・巻四に収める「西銘解義」は、現行本「西銘解」と文章に大きな異同が見られるが、趙順孫の言う「西銘解」は、あるいはそれのことかも知れない。宋本『朱子文集』については、吉田公平氏「宋本『朱子文集』について」（『東北大学教養部紀要』第四十五号　一九八六）参照。

（9）『経義考』巻二百十七に、「黄氏（幹）『論語注義問答通釈』、『宋志』十巻、未見（『一斎書目』、有之）。」と言う。

（10）『経義考』巻二百十七に、「輔氏（広）『論語答問』、未見。」と言う。

（11）『経義考』巻二百三十四に、「輔氏（広）『孟子答問』、未見。」と言う。

（12）佐藤氏前掲書「解題」、井上進氏「『北渓字義』版本考」（『東方学』第八〇輯　一九九〇）参照。

（13）『経義考』巻百六十二に、「陳氏（淳）『中庸大学講義』一巻、未見。」と言う。

（14）『経義考』巻百六十二に、「陳氏（孔碩）『中庸大学講義』、未見。」と言う。

（15）『日知録』巻十八「四書五経大全」は、蔡模の『四書集疏』に言及するが、『経義考』巻二百五十二には、「蔡氏（模）『四書集疏』、未見。」と言う。なお、佐野氏前掲書（二二二頁）に言う『通志堂経解』本とは、『論語集説』十巻、（宋）蔡節撰、のことであり、『論語集疏』ではない。

（16）『経義考』巻百五十六に、「葉氏（味道）『大学講義』一巻、佚。」と言う。

（17）『経義考』巻二百十八に、「胡氏（泳）『論語衍説』、未見。」と言う。

（18）『経義考』巻二百五十二に、「潘氏（柄）『四書講義』、未見。」とある書のことか。待考。

（19）『経義考』巻二百五十二に、「黄氏（士毅）『四書講義』、未見。」とある。

（20）佐野氏前掲書第四章「四書注釈書の歴史」二、「注釈書の続成――集成書について」（二二一～二五三頁）参照。

（21）拙論「『四庫全書総目提要』「永楽三大全」の研究」（『福岡教育大学紀要』第一分冊・文科編五十六号　二〇〇七）参照。

（22）……其書因元倪士毅『四書輯釈』稍加点竄。顧炎武『日

知録』曰、自朱子作『大学・中庸章句・或問・論語・孟子集註』之後、黄氏有『論語通釈』。其采『語録』附於朱子『章句』之下、則始於真氏。祝氏仿之、為『附録』。後有蔡氏『四書集疏』、趙氏『四書纂疏』、呉氏『四書集成』、論者病其泛濫。於是陳氏作『四書発明』、胡氏作『四書通』、而定宇之門人倪氏【案定宇、陳櫟之別号】合二書為一。頗有刪正、名曰『四書輯釈』。永楽所纂『四書大全』、特小有増刪。其詳其簡、或多不如倪氏。『大学・中庸或問』則全不異、而間有舛誤云云。於是書本末言之悉矣。……

(23)「此書惟『大学』一巻、『中庸』一巻為徳秀所手定。……其子志道序亦惟称『大学』『中庸』、而云『論語』『孟子』集註雖已点校、『集編』則未成。……是『論語』十巻、『孟子』十四巻、皆劉承以徳秀遺書補輯成之者也。……」因みに、『大学集編』『中庸集編』所収の『朱子語類』については、論者はまだ詳細な検討ができていないが、佐野氏前掲書（二二六～二二九頁）に、既に基礎的な考察がある。

(24)『経義考』巻二百五十三に、「祝氏（洙）『四書集註附録』、未見。」と言う。

(25)『経義考』巻二百五十二には、「呉氏（真子）『四書集成』、存。崑山徐氏含経堂有之。」と言うが、佚存については未詳。

(26)「四書集註大全凡例」に、「『四書』大書朱子『集註』、諸家之説分行小書。凡『集成』『輯釈』所取諸儒之説有相発明者、采附其下。其背戻者、不取。凡諸家語録文集内有発明経註、而『集成』『輯釈』遺漏者、今悉増入。」と言う。

(27)『四書通』に寄せた鄧文原の序文にも、「『纂疏』『集成』博采諸儒之言、亡慮数十百家、使学者貿乱而無所折衷、余竊病焉。」と言う。

(28)『経義考』巻二百五十四に、「陳氏櫟、『四書発明』三十八巻、未見。」と言う。

(29)『大学通』一巻、『中庸通』三巻、『論語通』十巻、『孟子通』十四巻。『経義考』巻二百五十四には、「胡氏（炳文）『四書通』二十六巻、或作三十四巻。」と言う。

(30) 佐野氏前掲書（二三六～二四九頁）参照。王重民氏『中国善本書提要』（上海古籍出版社　一九八三）「四書輯釈大成三十六巻」（四一頁）は、『四庫提要』が『重訂四書輯釈』二十巻として取り上げているのは、王逢（字は原夫、号は松塢、楽平の人）の重訂本であり、四庫館臣はそのことに気付いていないと指摘する。

(31) 詳しくは、佐野氏前掲書（二三五頁）参照。

(32) 佐野氏前掲書（二四六～二四七頁）参照。

(33) なお、『四書集註大全』に残る『四書纂疏』由来の文章はかなりの量にのぼるが、一例を示せば、黄榦の著作や語録を引く際、通例では「勉斎黄氏曰～」とあるのが、単に「黄氏曰～」とある場合、また、陳淳の著作や語録を引く場合に、通例では「北溪陳氏曰～」とあるのが、単に「陳氏曰～」とある場合など、そこに引かれた黄榦や陳淳の言葉は『四書纂疏』に基づくと考えてよいであろう。

(34) 石立善氏作成の「南宋刊行朱子語録合集九種一覧表」（「古本朱子語録について――『朱子語類大全』未収語録書三十七種」『西脇常記教授退休記念論集　東アジアの宗教と文化』

二〇〇八　所収）による。なお、『朱子語類大全』はじめ諸々の『語類』『語録』の成立背景については、友枝龍太郎氏『朱子の思想研究』（春秋社　一九七九　改訂版）附録一「朱子語類の成立――付・朱子文集――」（五〇三～五三七頁）、附録二「朱子語録類要について」（五三九～五六二頁）、岡田武彦氏『岡田武彦全集一六　朱子の伝記と学問』（明徳出版社　二〇〇八）「朱子語類の成立とその版本」（二二五～二六二頁）等を参照。因みに、黎靖徳の『朱子語類大全』編纂以前の古本「朱子語録」の研究は、近年飛躍的に進んでいる。論者は未だそれらを精査できていはいないが、石氏の前掲論文、同じく「朝鮮古写徽州本『朱子語類』について――兼ねて語録体の形成を論ずる」（『日本中国学会報』第六〇集　二〇〇八）、『晦庵先生語録大綱領』攷――附録朱子・范如圭・程端蒙・李方子の佚文――」（『中国思想史研究』二八号　二〇〇六）、そして、徐時儀氏『《朱子語類》詞滙研究（上）』第一章「朱子《語録》与《語類》的伝本与語料」（三〇～一六〇頁）（上海古籍出版社　二〇一三）等を参考にした。

(35) 石氏「古本朱子語録について」参照。石氏も指摘するように、『文献通考』巻百八十四「論語集註」にも見られる。また、『経義考』巻二百十七「論語集註」、王懋竑撰『朱子年譜』淳熙四年の条にも引かれている。

(36) 朱熹の著作については、『朱子全書』（上海古籍出版社　二〇〇二）を参照した。

(37) 友枝氏前掲書附録一「朱子語類の成立――付・朱子文集――」（五一六頁）は、黄震の見た語類が、「徽類」「徽続類」であると指摘する。

(38) 記録者は、「銖。時挙録同。」とある。

(39) 『朝鮮古写徽州本朱子語類』（中文出版社　一九八二）

(40) 陳淳は、「語録姓氏」によると、紹熙元年（一一九〇）、慶元五年（一一九九）所聞。もと『饒録』巻十三、十四所収。なお、朱門弟子の伝記については、田中謙二氏「朱門弟子師事年攷」（『田中謙二著作集　第三巻』（汲古書院　二〇〇一）参照。

(41) 周謨、字は舜弼、南康軍建昌の人、一一四一～一二〇一。「語録姓氏」によれば、淳熙六年（一一七九）以降の所聞。もと『饒録』巻四十五所収。

(42) この語録は『四書集註大全』にも引用されるが、『四書輯釈』の当該箇所には見られないので、『大全』編纂時に加えられたものかもしれない。

(43) 徐寓、字は居父・居甫、瑞安府永嘉の人。「語録姓氏」によれば、紹熙元年（一一九〇）以降の所聞。もと『池録』巻二十、二十一、『饒録』巻四十六所収。

(44) 『四庫全書』所収。『四庫提要』によれば『永楽大典』本。

(45) 『大学集編』『四書輯釈』『四書集註大全』等に見られる。

(46) 『晦庵先生語録大綱領』は、中華再造善本・子部・唐宋編に影印本が収録されている（北京図書館　二〇〇四）。詳しくは、石氏「『晦庵先生語録大綱領』攷」参照。

【附記】本稿は、二〇一三年十一月に那覇市で開催された「『校勘与経典』国際学術研討会」における口頭発表の内容が元に

なっている。会議を主催された琉球大学の水上雅晴氏、並びに有益な御助言を下さった上海師範大学の石立善氏に謹んで御礼申し上げたい。また、口頭発表の段階から、広島大学名誉教授佐藤仁先生には多方面にわたり多大な御指導を賜った。衷心より御礼申し上げるとともに、論者の学力が及ばず、先生の御示教を十分に生かし切れていない点については、反省の上、今後の課題とさせて頂きたい。なお、本稿は、科学研究費補助金（基盤研究C）「永楽三大全の基礎的研究」（平成十八年度～二十一年度、課題番号：一九五二〇〇四三）、並びに同「明代郷・会試『三場題目』の思想史的考察」（平成二十四年度～二十六年度、課題番号：二〇二九四八四五）による研究成果の一部である。